

台湾作家の講演に思う

4月18日、東京大学駒場キャンパス「900番教室」で行った台湾の作家、龍應台氏の講演会には500人を超える聴衆が集まった。彼女のベストセラー『台湾海峡1949』の簡体字版が出版された記念のイベントで、聴衆の大半は中国人だった。簡体字とは簡略化した漢字体系で主に中国大陸で使われている。本書は中国で発禁処分とされ、地下で出回っているが、台湾での出版から17年後に、中国人経営の東京の簡体字書籍専門の出版社から出版されたのは感慨深い。中国ではできないことが、言論の自由を保障する日本ではできるのだ。

「批判的思考」はなぜ重要なのか

実は、私は講演会開催の告知をしたところ、なぜ龍氏のような人を呼ぶのかと非難された。龍氏は2025年、『ニューヨーク・タイムズ』に「台湾に残された時間は少ない」という文章を発表し、米国の防衛政策や頼清徳政権によるスパイ対策を念頭とする軍事法廷の復活を批判し、対中融和路線を促している。「台湾人に投降させよう」というのか」と反発する人が少なくなかった。

正論



東京大学教授 阿古 智子

今回、龍氏は個別の政治家や政策には言及しなかったが、戦争が勃発すれば制御不能に陥り、最も壊滅的な打撃を受けるのは台湾だと強調し、安全な場所から戦争による崇高な「正義」を実現しようとする者は、立ち止まって考えるべきだと述べた。

台湾でこうした話をすれば、龍氏はまた批判されるだろう。彼女はほとんど台湾人のいない環境で、いつもよりリラックスしているように見えた。質疑応答では龍氏の視点に疑問も提示されたが、ほとんどは共感する内容だった。

忍耐強く情報集め議論する

私は龍氏の「守るべき国家とは、領土と主権だけでなく、理性と批判的思考力も含む」という主張に同意する。強大な権限を持つ政府がそれを乱用し、国民の基本的な人権や自由を侵害することがないよう、民主主義下において、私たちは立憲主義や三権分立で権力を制限してきた。「正義を決定す

るのは誰なのか。市民は、自分が決定していない戦争を拒否する権利を持つのか」と龍氏は問う。では、私たちはどのようにして批判的に国際情勢や自国の状況をとらえ、国家と向き合うことで、戦争を防止できるのか。

この問いを胸に、私は3月に沖縄県名護市辺野古沖で修学旅行中の同志社国際高校の生徒らに乗せた小型船2隻が転覆し、女子生徒と船長の男性が死亡した事故を思い浮かべた。船は必要な登録をせず運航し、安全確保の不備が指摘

さらには私が考えたのは、高校生らは日本の教育環境において、十分に批判的思考を育むことができているのかということである。沖縄は歴史的・今日的文脈において、多くの難しい課題を抱える。そのような場所に修学旅行に行く上で、教師と生徒は活動の内容を十分に議論したのか。その機会が十分に与えられなかったのであれば、学校と教師には大きな責任がある。

この事故をめぐる論争の中で私が感じるのは、メディアも関係者も、自らの立場を不利にし得る情報や見方はなるべく伝えず、有利な部分を強調するということだ。それによって、立ち位置の異なるグループの間で攻撃し合う側面が拡大し、忍耐強く情報や意見を収集し、議論を深めることができなくなっている。

龍氏の講演会が開かれた「900番教室」では1969年5月13日、三島由紀夫と全共闘が階級闘争、自我、他者などについて「伝説の討論」を行った。龍氏は戦争が続けば、私たちは「戦争という機械の歯車として生き続けるしかない」と述べた。単なる歯車として生きたくないなら、国家と社会を「私」の視点から分析し、主体的に「正義」の在り方を考え、それを実践していかなければならない。

ある。生徒においても、批判的精神をもって教師に問いを投げかけ、企画を一緒に練り上げるのが教育としては理想だ。この事故について国会で文部科学相に質問した国民党の伊藤孝恵議員は「学校が主体性を持った結果、事故が起きた」と述べ、私立学校への自治体の監督権限が機能していないと指摘した。当然、安全管理に対する監督は重要だが、私は主体性を逆にとらえている。つまり教師も生徒も主体的に考え行動できなければ、自らの責任を他人に転嫁するような構造が根付いてしまうということだ。